

沖縄民俗宗教の核：祝女(ノロ)イズムと巫女(ユタ)イズム

SAKURAI, Tokutaro / 櫻井, 徳太郎

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

6

(開始ページ / Start Page)

107

(終了ページ / End Page)

147

(発行年 / Year)

1979-06-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013102>

沖縄民俗宗教の核

——祝女イブムと巫女イブム——

桜井 徳太郎

一 はじめに——問題提起——

私は、復帰以前の沖縄に数回、復帰後もまた数度おとずれまして、沖縄における民俗文化の実体・本質、沖縄の方々の心の根に直接触れたいという気持で民俗学の調査に当たってまいったわけでございます。何とかして沖縄人の心を理解したい、何とかして島人自身になりたいと心がけたわけでございますけれども、所詮大和人の他者でございますから、盲者が巨大なる象を撫でるようなことになりまして、実際なかなかその本体をつかみえない。したがってまた、これから申し上げる中にも多くの誤りがあるかと存じます。しかし本日は、盲蛇に怖じないという気持で卒直に皆様の前に大胆な仮設を

提供いたしました、忌憚のないご批判を仰ぎたいと存ずるしだいでございます。

沖繩において民俗宗教のもっとも中核になるべきものは、いうまでもなく部落・村落におきましてもっとも神聖とされております御嶽ウタキの信仰であることは今さら申し上げるまでもありません。そして、この御嶽の信仰をささえてまいりましたものは、私があえて申し上げるまでもなく女性の司祭者カミンチュ（神人）であります。これは一般にプリースト(Priest)正しくはプリーステス(Priestess)、内地でいいますと神官・神主という語に相当しますが、これがすべて女性によって担われているところに沖繩の特色があるわけです。その代表格は沖繩本島でノロ（祝女、沖繩語で言いますとスルあるいはヌール）であり、宮古島や八重山方面ではツカサ、チカーとよばれています。したがって、沖繩におきます民俗宗教のもっとも根幹的な一つの核として、ノロやツカサを中心とした神人カミンチュによる機能を想定することに異を唱える方はないでしょう。それを本島の祝女ノロに代表させてノロイズム、あるいはヌルイズムといった方がいいのかもしれませんが、そういうふうに呼ばせていただきたいと存じます。ノロたちによる御嶽の祭祀は、部落・村落など共同体の宗教的シンボルである御嶽を中心として行なわれるわけでありまして、どちらかといえば公の祭りであり公の神事であります。

これに對しましてもう一つ、沖繩において忘れることのできないのは、家だとか個人など私的な領域にみられる信仰であります。たとえば吉凶を判断したり、運勢をみたり、健康の祈願をしたり、さらにはガンスグトゥ・つまり先祖のお祭り、さらにはお墓のこと、あるいは洗骨シンクツチ、そしてマブイアカ

シ（魂分れ）、タマスウカビ（魂浮かび）などもろもろの口寄せをいたします。そういうプライベートな内的な信仰の領域を担っている一連のものがございます。これは、本島では主としてユタといわれておりますが、宮古諸島にまいますと、カンカカリヤ（神憑り）あるいはトキ・ムヌスなどといわれ、八重山群島にまいますとニゲーピトゥ（願い人）・カンピトゥ（神人）などといわれております。ようするにプライベートな民間信仰の領域を管轄している民間宗教実修者でございます。これを本島のユタ（民間巫女）に代表させて、ユタイズムと称させていただきます。

けれどもここで大変重要なことは、宮古島の神憑り、つまりカンカカリヤに代表されるように、神の霊だとか、死んだ人間の霊が乗移りまして、そうした精霊になり代つてもろもろの判断（ハンジ・アカシ）をしたり、口寄せをする、ということでございます。こうした現象を学界では一般的にシャマニズム（Shamanism）、そして霊媒的行為をする人をシャーマン（Shaman）といっております。いたしますとプリーステスにあたるノロ・ツカサと、シャーマンにあたるユタ・カンカカリヤ・ニゲーピトゥと、この二つが、私は、沖縄における民俗宗教のなかで大変重要な役割を果していることにかんがみて、それが中心的な核を形成するものと、そういうふうと考えておるわけでございます。

このうち第一のノロイズムにつきましては、つまり御嶽の祭祀およびそれを担いますところのノロについては、私があえて申すまでもなく沖縄学のもっとも重要な課題として、これまでに大変広くかつ深く研究が進められ、たくさん著書論文が出されています。^①したがって、人によりまして、

沖縄民俗宗教のすべてはこのノロイズムである、御嶽の祭祀である、というふうにいつてしまう方があります。これに反して、ユタなどは共に語るべきものではない、これは迷信であり、淫祀邪教であり、こういうものはブチ壊すべきであり、葬るべきである。そんなことが二〇世紀後半の現代沖縄にあることじたい大変恥ずかしい。むしろ地下に押しこめてしまって、なかったことにしようという、そういう意向がまた一方に強いわけであります。はたしてそういう考え方が健全であるかどうか、あるいは学問的に正しい立場であるかどうか。この点に関して私は深い疑問を感じております。そういう立場から『沖縄のシャマニズム』という本を出させていただいたわけでございます。⁽²⁾もちろんユタイズムのなかには唾棄すべき要素はたくさんあります。しかし、唾棄すべき要素がたくさんあるからといって、実情を歪めたり研究の立場から外して主観的な価値評価を下すとか、学問の対象領域から抹殺するなどということは、実はあまりにも偏見であり、あまりにも一方的であって許さるべきではない。むしろ祝女とともに両両相まって研究を進めるべきである、という考えに立つのであります。

二 調査研究の傾向

沖縄におけるユタイズムの研究はいろいろの点で制約がありました。まずユタそれ自身が権力者によって弾圧されたという歴史的背景をもっております。「ユタ征伐」とか、「ユタ刈り」といわれ、為

政者の肅清をうけてまいりましたので、肩身の狭い思いを抱いて生きてきたし、また身分的にも大変蔑視されている。それに対して尚王朝では逆にノロを高く評価し、それを王朝の宗教政策の重要な一環としてとりあげてまいりましたので、ユタの地位は相対的にますます低くなり、いきおい地下へ潜伏することになりました。ところが、にもかかわらず実際の家庭生活におけるユタの活躍、カンカリヤの機能は、私があえて申すまでもなく相当なものでございます。これは一寸でも皆様の私的な家庭の実状を考えていただければ、すぐ諒解されるところでございましょう。どうしてそういう大事な領域を、学問研究の対象から外そうとしたのでしょうか。これは、私にとりまして全く解せないところであり、また大変遺憾なのでございます。

それでは沖繩の知識人がすべてこれに対して無関心であったかという点、そうではないのでございます。沖繩学の開創者であり、その学殖の高さにおいて今や日本はおろか世界に冠たる伊波普猷先生は、一九一三（大正二年）、今から六五年前ということになりますが、『琉球新報』に、三月十一日から二十日まで一〇回にわたり「ユタの歴史的研究」という題で論文を発表されています。これは、『沖繩県史』資料篇の九巻、また最近出されました『伊波普猷全集』の第九巻にもつておるので、皆様の目に届いたことと存じます。趣旨はユタが沖繩における宗教史のうえで非常に重要であるということを指摘し、ノロと並んで十分に研究しなければならない、という点を強調しているのであります。そういう伊波先生に大きな勇気を与えたのは日本民俗学の開創者であり、私の恩師でもあります。

柳田国男先生でございます。伊波先生は『沖縄毎日新聞』に、大正元年つまり先の論文よりも一年先に、「古琉球の政教一致を論じて経世家の宗教に対する態度に及ぶ」と題する論文を掲げ、ユタを軽視する世論の啓蒙に尽くしたわけです。そして、その抜刷を柳田先生にお送りしたわけでございます。柳田先生は、ユタ研究は大変重大な問題である。ノロ研究と並んで是非とも解明しなくてはならない問題である。しかし、それは内地の人では不可能である。機微に属することがらはどうしても同郷人の沖縄の方々によって研究してもらわなくてはならない。君こそそれにふさわしい方であるという激励の手紙を差上げたのでございます。それに勇気をえて、先ほど申し上げた論文を書かれたわけでございます。

その内容は老大なので簡単にご説明できませんけれども、ユタのことなどは、ばかばかしいと思われる方があるかもしれませんが、このばかばかしいことが実際は沖縄の社会に存在していることはいなめない。かの哲学者ヘーゲルは、一切の現実なるものはことごとく理に合せる。存在しているものは何等かの存在理由があるのだ、というふうに申している。だから、ユタが存在していることは、それだけの理由があるのだ。だからそれを研究しなければならない。しかも、沖縄の人口は五〇万人、その内の半分は女子である。その女子が斯くのごとく真剣に問題としてゐるところのユタ、それを等閑にしては可笑しい。そういう現況に眼をそむけてはいけない、そこを前提として進むべきだと強調しているわけです。この論文の中で皆様にご紹介したいのは、次のような譬え話を引いて論旨を述べ

ている個処であります。

子供を有つてゐない婦人が人形を弄ぶことがあります、たとへて言へば、子供を愛する心は信仰で、人形を愛する心は迷信であります。ただ人形を棄てる迷信を棄てると叫ぶのは残酷であります。私共は人形や迷信に代るべき子供と信仰とを与へなければなりません。私は迷信の打破には科学思想を鼓吹するのが何よりも急務だと思つて居ますが、これと同時に宗教思想を伝播させるのも急務だらうと思ひます。

この辺の所は特に女子教育の任に^(ママ)当て居られる教育家諸君に十二分に研究して貰ひたいのであります。

『沖繩縣史』資料篇9 五八二―三頁

ユタには悪いところもあるけれど悪い悪いといったところで少しも解決にならない。問題が解決されるためには、十分にそれを学問的に研究して、どこが良いのか、どこが捨てざるべきところなのかを判断しなければならない。そのためにはユタ研究は無視してはならないといっているのです。これは大変大事な忠告でございます、この忠告は現代にも、現代の学界に対しましても、そのまま生きているといえましょう。今日の学界では、ノロイズムの研究が沖繩学の中核であるということ、これは圧倒的な勢力を占めております。そうして、ユタイズムなどとはとるべきものではないという主張がございます。だがしかし最近では、若い層からだんだんとユタイズムの研究が進められていることは大変ありがたいところであります（残念ながらいちいちの氏名や論題は省かせて頂きます）。けれども依

然としてヌルが主であり、ユタは軽いものであるという傾向が強いのはいただけません。ヌルとユタと同じ重さをもつものだ、同じ起源であるなどという説を立てようものなら、もっての外だという反発があつて、両者は全く相容れざるもの、両方の領域を分けて別流に考えねばならないのだという主張が強いのであります。しかしながら私は、そのような主張を繰返すかぎりにおいてノロ研究も進展しないし、ユタ研究ももちろん進展しない。今日、壁につきあたったノロ研究とユタ研究をどうやって乗り越えてゆくか、そうしてこの沖繩学の発展に資することができるか、ということ考えたときに、私は第三の問題点、第三の研究領域を提示しなければならないという念慮を押さえることができないのであります。そこで、それはどのようなものなのか、どうして可能であるか、どういう方法的な根拠によってそれができるのであるか、その素描を本日ここで申し述べたいのでございます。

三 新しい課題——第三の問題点——

御嶽を中心とした神人カミシテユの神役をずっと研究してまいりますと、極めて強いシャーマニスティクな要素の存在をみとめないわけにはゆきません。もうすこし端的にいいますと、特に最近では神人カミシテユの中からどんどんとユタが創出されているという事実でございます。また他方ユタの機能を十分追究してまいりますと、もちろん本来シャーマンでございましたから、その機能がだんだんと拡大されて神役・

神人の機能の中に強く入りこんでいる。そういう領域のあることを見つけるわけであります。つまり、そういう両者がおたがいに触れ合っている第三の領域、それこそ実は究明しなければならないのです。しかもこの領域はほとんど手つかずの状態である。ですから、それを解明することによって、逆にユタの本体が分り、またスル・カミンチュの本体へより一層的確に迫ることができるということになるかと存じます。そこで本日は、いろいろ例を申し上げて、非常に細かいことにわたりますので恐縮でございますけれども、暫くご辛抱いただきたいのです。実はこの問題を追求するフィールドとしては那覇とか、首里とか、あるいは沖縄市、名護市というような都市または都市化した地域は適当ではありません。本島でも山原・国頭地方、あるいは伊是名・伊平屋・久米島・津堅・久高島といった離島とか周辺諸地域に指向しなければならないのであります。その中で皆様に最もよく知られており、また内地の方でも沖縄の三大祭などといひまして、宮古のウヤガン祭り、八重山の豊年祭り（ブーリー）と並ぶ、大変有名なウンジャミ（海神祭）のことを申し上げてみたいのであります。

ウンジャミの神役　国頭地方のウンジャミはシヌグとともになお古風ゆたかに執行されておりますが、その中でも古形を保っている一つに国頭村与那のウンジャミ祭がございます。これは、去年（一九七七）沖縄国際大学の平敷令治教授が指導いたしまして、民俗学実習参加の学生諸君が実に丹念に調査した、そのレポートが出ております。⁽³⁾それをご覧になると祭りの状況がよくわかります。このウンジャミは、『琉球国由来記』（巻十五、一七一三年）にも触れてありますので、大変古いということが

よく分るわけです。しかし、歴史的な変遷、とくにマキ^ヨや間切など集落の変遷により、その組織や施行の方法は非常に変化してきています。その変化した姿態の中から、周辺諸地域のウンジャミと比較しながら原始態に迫り原形を復元してまいりますと、いろいろのことがわかってくるのです。

大体あの辺では謝敷・佐手・辺野喜・宇嘉・与那という五部落をウイヌシマといっておりますが、ウンジャミはそれら各部落の合同祭祀という形になっておりまして、旧盆明けの亥の日に行なわれるのですが、一九七七年は九月三日でございました。その祭事をウイミ（オリメつまり折目）といっています。これが一番中心になるお祭りです。ところが、それよりも三日前（当日から数える）の酉の日（九月一日）に、ミタベーつまり三日崇^{タカ}べ（タカベとは、神人^{カインサヌ}が神をお迎える時にお祈りをする呪禱の祝詞。オモロ・ウムイの原形と極めて近い関係にある）の時に、本主題と関係ふかいろいろな行事が行なわれます。これは本土における宵祭・前夜祭に当るお祭りです。そしてさらに、本祭のウイミの次の子の日（つまり九月四日）に、アトウイミ（後折目）つまり後祭りというのが行なわれるわけでございます。本土でみられる宵祭・本祭・後祭の三要素構成の祭祀形態がそのまま展開しているわけでありませう。この中で私が本日非常に注目したいと思ひますのは、その宵祭にあたるミタベーつまり三日ウタカベのことでございます。アサギという神事を行なうところの祭り小屋が祭場となります。そこでは一番真中の正座にヌル（祝女）が座わり、その脇にワカヌル・ウツチガミ（掟神）・ムラガミ（村神）・ニীগミ（根神）などの神女、それからシルガミ（勢頭神）という男

性神役が並びます。そうしてその年に新しく神女になる候補者がその末に坐して控えているわけでございます。これらの神役は一晚そこで籠るのですが、この体勢をクムイザー（籠り座）といいます。ただそこで終夜ウタカベを唱えウミを謡って籠っているわけでありまして、今日では、それ以外のたいたの行事がないのです。けれども以前は白衣裳をつけ、垂らし髪の新任の女性が太鼓に合わせてエーハイ、ヤーハイと掛け声を立てたり、カタナデーをするうちに神がのりうつるのです。どうしても神のセジをうけられないものは怖しくなつて逃げ去つたということです。こうした祭儀をアラハンサガといっております。アラハンというのは、新しい神様、サガは下る、就任するということでありますから、新任のカミンチュの就任式であつたとは断言できるかと存じます。いまでは、神歌をうたつてスルから新任のカミンチュへお盃を授けるといふだけで、極めて簡単でスターティックな行事となつております。しかしながら、初めから単なる盃を受けるだけの新任式であつたかどうか、まことにスターティックな非常に静かな儀式であつたかといえますと、そうではなくて、久高島のイザイホー（イジャイホウ）を偲ばせる祭儀があつたことをうかがわせる断片がのこっている点を見逃してはなりません。もっと深い意味をもつ儀礼がそこに潜在しておつたのではないかと思ひます。

アラハンサガは、他の地方では別の言い方で呼ばれておりまして、アラハンハミサガとかハンサガとか、アラハンとかタムトクリというふうに表示を異にしておりますが、とにかく新しい神様（神様とはカミンチュのことをいう）が新しく任命されるというか、新しく出現するということの意味がある

わけであります。そういたしますとすぐ思いあたるのは、イザイホーの神事⁽⁴⁾でございます。齋場^{セイフ}御嶽^{ミタケ}の真東にあたる久高島で全島をあげて行なわれるところのイザイホーの神事です。

久高島のイザイホー

これは申し上げるまでもなく午年の十二年目に一回廻ってまいりまして、今

年（一九七八年は午年にあたる）は正にその当り年で大変な人気をよんでいるようであります。霜月十五日から四日間行なわれるわけですが、これは島の女性が少なくとも全部カミンチュになるための祭儀であります。つまり、午年の三〇歳から四一歳までの女性はことごとくこのイザイホーの神事に参加し、その儀礼を通過することによって部落祭祀や家・一門の祭儀を司祭する資格が賦与されるわけです。そうして、カミンチュになりますと、最初はナンチュという位につくのですが、やがてナンチュからヤジクになり、そうしてウンシャクという位をへて、最後はタムトゥになる。タムトゥになった時はもう六〇歳になっているというわけでした、すべての神役を経過して退任するのが七〇歳の定めとなっています。その一番最初のナンチュになる人、これの新任式が実はイザイホーなのでございます。イザイホーの神事は、秘儀（シークレット・セレモニー）でありますから、我々男どもはもちろんはいることができない。女性優先（レディーファースト）であります、その婦人でも、島人^{シマジン}でなければ駄目です。この神人の候補者たちは、一か月前に御願立をいたし、イザイガーで沐浴をし白木綿のドジン・カカンをつけ、洗髪のまま跣で神アシャギから入って行きます。そしてイザイ山に新しくクバと薄で葺いた籠り小屋のイザイヤに三晩、家族と別居別火で籠るわけですが、ここですうい

ことが行なわれているのか、とんと報告もなければ何もわからない。そして、しかもそのことを祭りや行事が終ってから出てきて口にいたしますと、神の祟りを受けるとか、咎を受けるといい、決して口外しないのです。ですからますますわからないのであります。

しかしながら、そこではタマガエのウプテイシジ（魂換の大神霊）をうけるとか、ティルル（神歌）を唱えている間に神が乗移るとか、いろいろと神憑りのための神事が行なわれる模様であります。神がかりになりますと、それこそフラグアーやフリムンのごとく、物狂いに陥る状況があるのだそうです。神が乗移る時には皆そういう状況になるのでございますが、それによって初めて神のセジ（霊力）を頂いたカミンチュに成ることができわけです。宮古の祖神（ウヤガン）祭りでも同様のことがみられます。⁽⁵⁾島尻だとか狩俣なんかで行なわれるウヤガン祭におきましても、まさしく神憑りをするところにライトモチーフをおくわけです。神霊が女性に憑くことによってカミンチュになる、その儀式であつたということが分かりますのでございます。

ツカサのクライヨイ 八重山では祝女に相当する神女を、ツカサ・チカー・チーカサなどと呼んでおりますが、あそこでは、新しく新任になるのをヤマダキといっているところが多いのです。あるいは、クライヌヨイともいいます。クライとは、新しい位、カミンチュのクライ、そうしてヨイは、祝いでありますから、そういう司祭者のクライに即くことの祝儀ということになりましょう。つまり就任式・新任式という言葉でありますので実に祭儀の実質的内容を的確に示しております。ヤマダキと

いうのは、非常に古い言葉であります。ヤマとは、八重山群島で御嶽のことを指すのです。またオンともいいます。つまり御嶽を抱くということでもあります。それによって、カンスデが起る、スデルとは人間が生まれてくる、神が生まれてくる、すべて出現するということの沖繩語です。つまり新しい神様がスデルのだ、新神が出現するということなのです。

これらの儀礼を見てまいりますと、まさにシャーマンの生誕と同じ現象に比定できます。シャーマンの生成にあたってはまずカミガカリになります。そして神の言葉を口走る託宣がみられます。この託宣がミセセルということになって、やがてウムイ・オモイ・オモロということにもなるわけであります。そういうふうを考えてまいりますと、一般的に今日では、非常に儀礼が衰退してまいりましたので本義をみるのがむづかしくなりました。けれどもそれらを復元しますと、今いったように神が乗移って、神憑りになります、そして新しくそこに人でありながら人間ではない神が出現する。その神によっていろいろの指示がなされ、人びとはその指示をうけて現世の暮らしを維持してゆく。ヤマダキによって神がスデル意味はそこにあったと思われまゝす。

ということになりますと、私は、今日ではその色彩が薄くなったわけでありませうけれども、沖繩におけるカミンチュは、ことごとく本来シャーマンであったか、少くともシャーマン性をもっていたといえるかと存じます。しかしそのことはご承知のように琉球王朝の神女統制の歴史、特に第二王朝尚真王の時に、聞得大君という、カミンチュを総統轄する中央集権の最高の神役を定めたことによって

大きく變化したと思います。そうしてその下に、それぞれ三平等^{ヒラ}ごとに各地のノロが支配される、そしてすべてのカミンチュが支配されるということ、あるいは大阿母^{オオアマ}とか、阿母志良礼^{アマシラレ}・大阿母志良礼^{オオアマシラレ}というふうな名前と呼ばれる地方ごとの高級神女、久米島のごときはチンベ^{チンベ}（君南風）と呼ばれていますが、そういうふうな特殊な名前をもつ宗教的權威者が国家的宗教組織のなかにくりこまれてゆくわけです。ようするに、各間切に存在しているノロをはじめ各神女を、政府の官制下に取込むことによって、本来の神憑り性を形骸化したということは、明らかにいえるのであります。

このように骨抜き^{ボネキ}の神女では、とうてい民衆の、最も望んでいる宗教的ニーズは満たされないことになりましょう。民衆のニーズとは何でしょうか。まず何といっても、共同体の将来のことです。村の運命やこの世^ヨがどうなるか、幸多きユガフウ（世界報）が来るかどうか、流行病^{ハヤリ}気は来ないだろうか、台風でやられやしないか、そういうことが一番の関心となるわけであります。そういう吉凶の判断^{ハッジ}・運勢^{ウンシ}をみることも、大変大事でありますから、当然その要求に応ずるものが必要となってくるわけがあります。これは非常に大事なことで、それを誰が担ったかということが問題になるわけであります。

コデの機能　　そうすると私は、それを担った一つとして、部落^{ソウボ}において今日なお健在のクデ（コデ）をあげないわけにはいきません。クデはあるいはクリと発音する所もあります。ところによっては、ウクデ・ウクデンガーといえます。また伊平屋島の田名あたりではハンジュナといえます。ハンジュナとは神女達、女性の神様達という表現であります。今婦仁の勢理客などではハーミグといい、神の

子をさす表現となります。こちら（沖繩本島）の方では一門・門中イシヤン・カシヤニという一種の同族団（ムトゥヤー〈本家〉とワカリヤー〈分家〉との家連合集団）があります。そのムンチューの宗教的機能を司っているのがクデであります。そのクデが、いつごろ出てきたかという起源はどうもはっきりわかりません。

先ほどの伊波先生の「ユタの歴史的研究」の中では、喜舎場朝賢先生の論文集である『東汀隨筆』の中の一部分を引いて、クデとはこういうものである、と述べているだけであります。大変重要な十八世紀成立の辞典であります『混効験集』を見ても、これはでてこない。ところが、「さしほ」という項目がございまして（外間守善編『混効験集―校本と研究―』九三頁）、その中でサシホは「くて（クデ）の事也 又くて（クデ）とは詫女の事也 今神人と云是なり」つまり詫（託）女というのは、神憑りをして神のことはを託宣する、ミセセルを発するところの神女である。今のカミンチュというのはこれである、というふうに書いてあります。オモロなどにはサシホ・サシボ・ムツキという語もありまして、これも同じことである、ということであります。サシホとかムツキという語がオモロなどに多く出てくるわけですけれども、そのコデのことは出ていかどうか私、まだ調べていませんので、後で外間守善先生あたりにお伺いしたのであります。ただここで皆様に申し上げたいのは、サシホとはクデのことなり、というふうに説明がついていることでもあります。つまりクデといえ、十八世紀段階において、場合にはそれ以前の沖繩人ウチナンチュにとりましては、それが何であるかという説明をしなくとも、ちゃんとわかるような語であった。つまり非常に一般化しておったということでもあります。

そのクデが、門中・^{イナム}一門の神事を司る、これは大変重要なのであります。そこでいろいろ調べてまいりますと、私の司会を務めてくださいます琉大の比嘉政夫先生が、大変立派な論文を書いておられます。⁽⁶⁾それは、玉城村の仲村渠^{ナカムートカリ}というところで（この仲村渠は、百名からの分村だということですが、これを詳しく分析するといろいろ問題が出てきます）、ようするに、ナカムートという一種の門中がございまして、そのナカムートの門中のカンタナ（神棚、カミウタナとも言う）に香炉が置いてありまして、その香炉を支えている人、その香炉に線香を上げて神事を行なうのがウクディンガである、というのであります。このウクディンガは、大変重要な機能を果たすのでありますが、ここで私は、ヌルとどういう関係にあるかに視点をおいて論文の要旨を紹介したいと思います。

玉城（間切）は、百名、奥武、仲村渠というそれぞれの部落が編入されており、ヌルと、その中でヌルが断然たる地位を獲得し威張っておるわけです。そして間切の祭祀で御嶽廻りをする時には、他の神女を引具し馬に乗って威風堂々と行くのだそうです。それを各門中のウクディンガたちは、それぞれの地域で待ちうけて迎える。そして御礼の挨拶が終わるとノロの後に随従して行列のなかに入るといふわけです。両者における地位の格差は顕然たるものがあり、敢えて説明するまでもなく実に明瞭であります。新しくウクディンガに任ずる時に、こういう儀礼がいかなるプロセスで展開するかは記してありませんので、スデル状況は知るよしもないのです。あるいはすでに就任の儀礼は脱落してしまっただけかも知れません。ただ間切のウマチが行なわれる前の日に、ノロがクバの葉を取

ってそれをウクディンガに渡すということが行なわれるとありますから、それによってセジが与えられるのかもわかりません。いずれにせよノロとウクディンガとの上下関係は明白であります。ですから、ウクディンガは公的にはノロとは比較にならぬほど低い地位に位置づけられております。けれども門中の私的な祭祀においては、その果たすところの役割は非常に大きいものがあります。これにつきましては東京都立大学の調査団が参りまして、沢山の事実を報告しております。⁽⁷⁾もう時間がありますので、本日は、省略させていただきますいたしたいのですが、そのウクディンガについて極めて重要な指摘を、イザイホーの神事の行なわれます久高島について、ちょっと申し上げてみましょう。

久高島のウクリインガ　久高島は、外間ヌル^{フカヌ}と久高ヌルという二人のヌルが中心でありまして、厳

然たる高いランクに位置付けられております。その下にこれを補助する掟神・根神など国神と称するカミンチュが若干あって、島全体の公の祭祀を担当する。しかもこれは、首里の琉球王朝と関係が非常に深いので、特にその位は高く位置付けられておるわけでございます。ところがあの島には四つの門中がございます。その四つの門中ごとに一人づつのウクリインガ（ウクディンガ、クデ）がおります。その一人、シモ門中の西銘カメさん、私が調査したのは昭和四五年でありまして、その時七五歳ですから、すでにタモトの役を下りた島きつての老カミンチュであったわけです。このウクリインガは、その島を開いたといわれる外間ニッチュ（根人）つまり門中のウフムトウ（宗家）の出身であります。何人かある姉妹の中でとくにウクリインガに選ばとられたのだけれど、それはどうしてかという、

まずサーダカンマリであつて、そして良くカミダリをすることが重要な条件となるわけです。その中で必ずカミダリを起こすものが出てくる。それが任命されるのです。だから、候補者は何人かいるわけですが、その中でカミダリを起こす、神憑りを起こす、つまり別の言葉でいえば、シャーマン的な素質を多分に持っている人がこのウクリンガになるという、この事実であります。

そのウクリンガは、門中のそれぞれの神事の司祭をする。と同時に、個人や家の祈願・卜占などを行なうのです。たとえば、結婚の話があるのだけれど、はたして乗っていいのかどうか。あるいは、家を建てるのだけれど今年建てたら良いのか、来年建てたら良いのか判断に苦しむ場合があります。そうすると、本島の婦人達がユタの家に駆け付けけるように、このウクリンガのところに赴いてその判断を仰ぐわけです。そのみならず、健康願ひ・先祖の祭祀・ガンスグトゥ・葬式・それからマブイワカシ（魂分かし）あるいはシンクチ（洗骨）というようなことに至るまで、つまり本島におきましては、正しくユタが行なっていることを、ここではウクリンガがやるのであります。⁽⁸⁾しかも久高島では、いわゆるユタは一人もいないのです。そこでウクリンガだけでは不安であるという人達は、舟を漕いで海を渡り、対岸の玉城、知念あるいは馬天や那覇へ行きまして、そのユタにハンジを仰ぐ、あるいはアカシをしてもらう、というわけです。つまり、今日ウクリンガが本島でやっているユタと同じような役割を果たしておったということは、これはもう歴然たる民俗的事実なのであります。そういうウクリンガに新任する場合でも、神ダリーがなくてはならない。神憑りをしなくてはなら

ない。そして、そこに神様が憑くのであります。しかも中には、自分自身に憑く特殊な神を捜し求めて発見する、つまり自分のタカベル神を新しく創造するということが行なわれるのであります。それをあちらでは、チツジノカミというのです。これこそ正しくユタ的機能を完全に果たしているといえましよう。そのウクリインガが、イザイホーの神事・御嶽の神事に重要な役割を果たす、ということ(9)をスライズムのみに依ろうとする人達は、何と解釈するのでありましようか。そのことを私は敢えてここで問いたいのでございます。

つまり、私がここで申し上げましたことは、ヌルは間切を単位とする官制化された地方神女制の最高地位にあるものではあるが、尚王朝官僚体制下においては完全に在来のシャーマンの要素を喪失し単なるカリスマ的權威を誇示するブリーステスになってしまったということである。そしてヌル地を与えられ、ヌル殿内ドウシチを与えられ、神事を施行すると、部落から全部貢物がいく。経済的には完全に保障されているわけであります。当然形式化され、官僚化され、そして宗教的には形骸化される。この形骸化された領域こそ、宗教的に民衆が実は最も要望しているところなのです。かつて民衆(シマンチュ)の要望を担いえたカミンチュであつたればこそ存在意義があるのです。しかしすでに官制の中に繰り入れられたノロには担う宗教力はありません。またそれだけの宗教的な靈力を持つことはできない。ただあるのは權威だけである。カリスマ的權威を押し売りしてやっているだけです。ちかごろはそれすらも怪しいものになっています。これに反し本当の宗教的機能、民衆の根にある真の要望に応

えているのはウクディンガであり、ノロよりも遙か低い位にあるカミンチュである。そのことを、われわれは銘記するべきではないでしょうか。こういう傾向は先島に参りますとさらに一層つものつてくるのでありまして、これからしばらく先島のことを報告してみたいと思います。

宮古島の神役制

まず宮古島でございます。宮古諸島では各地の調査をいたしてまいりましたので、かなり多量なデータを持つことができました。それを全部報告できませんので、一つに限らせていただきます(10)。

伊良部島というのが平良市のすぐ手前に見えまして、そこに佐良浜という大変大きな集落がございます。そこは、池間添(東の方にあるので東里ともいう)と前里添(西の方にあるので西里ともいう)の二つの区域に分かれております。その両方からカミンチュが出ておるわけですが、それをツカサといっております。あるいは、カミンチュの中で一番中心的な役割を果たしますのでそれをオーンマあるいはウフンマ(ンマというのは女性の意)といっております。そういうのが一人出ております。それから、それを補佐するナカンマが一名。そうしてその下にカカリャンマというのが一人おります。カカリャンマとは、神憑る婦人(が)という意味でありますから、名称からしてすでに大変注意を引く役名であります。その下に、いろいろと祭場の清掃をしたり、あるいは神様に供える物を作ったり神酒(みき)を醸造したりするニガインマが控えているわけです。ニガインマとは、神願いをする女性という意味であります。つまりここもまた、村の婦人達は皆、神拝みをするニガインマになる資格をもち、そのな

かから神憑りするカカリヤンマの出る可能性があったわけであります。

四七歳になりますと島の全部の女性が集まりまして、クジ（ユルフズ、揺り簞）を引きます。クジを引いて今申し上げた役割が当るわけであります。これらの神役に当った人がニガインマということになります。その中で先輩格がアネンマ、後輩格をオトンマといいます。アネ（姉）とかオト（妹）は、この世の人間関係をそのまま示す言葉で、大変懐かしさを感じる名称でございます。つまり、姉株を持っているニガインマのアネンマ、それから妹株を持っているオトンマというわけです。島には最高の拝所ウパルズという御嶽がございますが、そのウパルズ御嶽の部落祭祀の中心的役割を担うわけでございます。これはもう申し上げるまでもないことでありますけれども、御嶽のほかにナナムイ（七森）あるいはウガンジュ（御願所）という聖所がありますが、そういうウタキ、ナナムイ、ウガンジュで宗教儀礼を執行するのです。たとえば部落の豊年を祈願する、あるいは部落に流行病が蔓延した時にそれを神の力によって祓除してもらう。そういうニガイ、キガンをする時に、上述のカミンチュが、行列を作って御嶽廻りを執行するわけでございます。さて、そこで私がこれから申し上げたいのは、このカミンチュの内でツカサ、ナカンマ（ツカサの補助神役）という最高級の女性神役、これは祭司として祭祀執行の中心的役割を担うのみで、絶対に先ほどいったシャーマンの機能を果たすことはできない。つまり、占いをしたり、個人の健康祈願を行ったり、あるいはガンストゥつまり葬式だとか、タマスウカビ（本島のマツイワカシ）だとか、シンクチ（洗骨）という死者儀礼にはタッ

チできないのであります。

カカリヤンマのシャーマン性　ところが、カカリヤンマは二つの役割を担うのです。すなわち部落の公共性をもつお祭りの時には、もちろんツカサ、ナカンマを補佐して神事に携わるのでありますけれども、ヤーヌニガイ(家の願い。ヤーキニガイともいう)、あるいは学校を卒業したことを祝う、入学試験の合格を祈るといふようなときに行なうクライアガリヌニガイ(位い上りの願い)、あるいはまた内地や他島などへ就職その他で郷里を離れるときに航海の安全を願うトウヌブイ(唐上り)、そのほか家のヤクバレー(厄払い)、健康願^{ニヤ}い、その他私的な家庭行事の宗教的機能すべてを担うわけであります。そういう私的な神願い、つまり祈願・祈禱、あるいは卜占、時には口寄せなどのガンスグトゥにあたって中心的役割を果たすのがカカリヤンマでありまして、またモノシンマともいいます。あちらの発音ではムヌシンマとなっておりますが、女性のムヌスルということです。こちらでいいますと「物知り」に当るわけです。易者のことをムヌシリといいますね。あるいはシムツクリ(書物繰り、すなわち知識人、易者の意)とか、サンジンソウ(三世相)などといいますが、これは男でありますけれど、そういう女性のムヌス、物知りであるという語義をもつかと存じます。ところがカカリヤンマ、ムヌシンマには、自分が担当している家というのが固定して存在しているのです。ちょうど内地の檀家のように、家ごとにニガイにくるムヌシンマはちゃんと決っております。私の所でそういうニガイをしてもらいたい、ガンスグトゥをしてもらいたいという時には、きまっているモヌシンマのところへ頼み

にいきます。ときには両者の関係が世代を通じてつながっているケースもみられます。したがってそういう固定的関係になった時にカカリヤンマ、ムスンマはまたヤーダスあるいはヤージャスとよばれることになります。ヤーダス、ヤージャスというのは、ヤー（家）のサス（佐司、祭司）ということ、サスとは正に沖繩本島でいうカミンチュに当る意味をもつ言葉なのです。こちらのカミンチュは、むこうでは大体においてサスといっているのです。そのサスがとくにヤージャスとよばれるところに深い意味があります。つまり家のそういうガンスグトゥとかウラナイとかいうものを専ら掌るというわけでございます。しかもこれらのカミンチュが今ではクジビきによって選ばれますけれど、昔はそうではなくて、やっぱり神の乗りうつり、つまり神憑りによってきめられたものと思われまゝす。それをカンブリといいます。カンブリのブリはフレルという意味だと思ひます。こちらでは氣違ひのことをフリムンとか、あるいはフラグラーといいますから氣が狂れるという現象をさすわけです。尋常の人ではない、つまり神様がのりうつって神憑りになるということをおちらではカンブリといっております。そういう人達がカカリヤンマになるわけでありまゝすから、したがってまさしくシヤーマンだということが明らかでございます。

今申し上げましたムスンマあるいはモノシンマといわれるものの宗教的機能は、ヤースニガイ、あるいは個人のニガイという私的な領域を中心に展開しております、本島でユタが頻りに行なうマブイグミ、マブヤীগミに当る巫術もこころみまゝす。それをここではタマスツキ（魂憑け）といつてお

ります。またあそこでは、こちらのマブイアカシ、死んでから七日目ごとに刻んで四九日目までのうちにやる死者供養のための宗教儀礼がありますが、死者の靈魂を呼びだしてきて、それに成り代わってクチヨセをするわけでございます。天寿を全うして安らかな眠りについたものは兎も角、若死したり非業の死をとげたものは、この世に何らかの思いをのこして冥界へ赴くわけです。それをそのままにしておくとはよくない。死者が安らかにあの世へ行けないので遺族に障りや祟りを及ぼすという信仰が強いのです。そこで生前にその死者がこういうことをいい残して置きたいと思っていたこと、こういうふうなことをしたいと思っていたこと、つまり心中に含んでおったことを全部吐き出させるという形をとります。それをユタなりカカリヤンマが死者に代って口語りますから、それをきく遺族はいてもたってもいられなくなり涙滂沱とくだり、やがては号泣と化する愁嘆場が現出することになります。これは皆様よくご存じのことです。

そのことはかつて佐喜真興英氏なども報告してくださったことがありますので、沖縄の古い世代の文化人・知識人達はこの巫俗について、また大変な注意をもって眺めておったのであります。それを次の世代、最近の学界ではどうも無視しがちであるということの事情を、私どもはもう一度ここで反省してみなくてはならないのではないのでしょうか。とにかくそういうマブヤーグミに当るタマスツケつまり脱出の靈魂を取り戻してもとの体に憑ける先島さきしまの巫俗は、こちらと大体似たような形であります。たとえばマブイの落ちた所で小石を拾ってきて、病人の着衣に入れて患者の懷に抱かせる。ある

いは頭にのせる。そしてマブヤーゼン（魂の膳）を置き、その上にマブヤーメシ（魂の飯）を供えてウグンをし、あとでマブヤーメシを食べることによって病人は恢復するであろうということの期待、その巫儀をこちらではマブヤーグミ、あるいはマブイグミといい、今でも盛んにみられます。

また、宮古島では個人が、男であろうと女であろうと（大体結婚後でありますけれど）個人ごとに我が身を守ってくれる神様を勧請し、それをマブガンとかマウガンといいます。そしてそのマブガンを祭るマブ棚を家の一番座と二番座の境に吊って毎日イチバナ・ミズなどを供え、拝むのであります。そのマブガンを発見し、めいめいのマブガンを各自に勧請してくれる役割を果たすのが、先ほどいったムスンマのヤージャスでございます。そしてさらには、死者儀礼とくに茶毗やグワンスグトゥに關しても（今では平良市に一つ寺院がありますけれども、辺地や離島にはお寺や坊さんはございません）すべてムスンマが中心になって執行されるわけです。祝祭の時には祝福のアーグを謡い、死や悲愁の時には悲しみのアーグを唱えるのでございます。そしてミマヌウギヤー（三股のススキ）で悪霊や魔ものや穢れを祓う。また死霊が他者に憑いて冥界へと誘引しないように祓霊の諸儀礼を展開する。これは大変興味があるのですけれども、時間がありませんので割愛させていただきます。⁽¹²⁾そのマブガンも当の司祭者本人が死んでしまえば現世での守護神じたいの機能は必要でなく、使命は終りとなるのですから、それを棺箱とともにお墓へ持って行って遺骸と共に埋めてやる。そういう時のいろいろの指図をするのもまたムスンマでございます。

大体死んでから三日目あるいは七日目に、丁度こちらのマブイアカシに当る行事のカンス（ビ）トゥ・バカーズ（神人別れ。カンとは神と書きますけれど死者のことです。バカーズは別れ）が行なわれます。ここでは一般に死んだ人を全部カン（神）というのです。本土では死者のことをホトケといいますが、ど、こちらでは全てカミであります。神と人との別れということです。つまり現世にあるイチミ（生身）とあの世のグシヨウ（後生）へ赴く死者と、ここで別れるのだという儀式を行なうわけですが、そういう死者儀礼の中心となるのも、このムスンマであります。その他キガズンニガイ（怪我人祈願）といまして、こちら（沖繩本島）でリュウグニガイ（竜宮祈願）というのと似ていまいしょうか、交通事故とか遭難とかで非業の死を遂げたものに対しましては、ブタを犠牲にして（昔はウシを殺したのだそうですが）たいへん大規模な慰霊行事をやります。そのキガズンニガイもまた、このムスンマが司祭者になるのです。そして七日七日ごとのニガイすなわちハチナンカ・ターナンカ・ミーナンカとつづき、四十九日^{シンジユウニチ}にいたりますけれども、それも全てヤージャスつまり家づきのムスンマが儀礼の執行者になるということにきめられております。

一つの事例だけで断定することは不安であらうと思いますので、もう一つ私が調査した来間島の話をしたのですが、時間がありませんので割愛させていただきます。拙著『日本のシャマニズム』下巻でこのことに触れております⁽¹³⁾し、また沖繩全体につきましては若干『沖繩のシャマニズム』のなかで実例を挙げておきましたので、ご関心あるお方はどうぞそれをご覧になっていただきたいと

存じます。その外、先ほど述べましたように宮古本島の北の方、平良市の大浦・島尻・狩俣、そして南の方にまいますと、とくに私が注意して見たのは城辺町保良、あるいは仲原というような所ですが、そういう所もすべて省かせていただきます。

石垣島神役の特色

さらにもう少し先にまいて、八重山を落すわけにはいかないのであります。八重山のことは司会をしてくださいます比嘉政夫先生が石垣市の郊外川平湾に面しております川平という所を大変詳細に調査して下さいました。この報告は学会で高く評価されておりますので、皆様すでに十分に存じのことと思います。⁽¹⁵⁾私もおくれればせながらそちらに参りまして調査をさせて頂きました。それから石垣市の登野城、それからその近くの平得、そして宮良・大浜、そして白保という所にも参りました。⁽¹⁶⁾これにつきましても十分に申し上げる時間はありません。

琉球大学で社会人類学教室を主宰なさっております饒平名健爾先生が、一九七二年から七四年にかけ六回も参りまして、大変詳細な調査を実施されました。その報告が去年（一九七八）の六月に出版されております。⁽¹⁷⁾これは皆様ご覧になっておられるかと存じますので今更申し上げるものなのですが、社会人類学の調査報告として画期的な成果と高く評価されているのでございます。

石垣市の東の方にある白保は、すでにブリー（豊年祭）などで紹介されておるところで、以前は八重山郡白保村といわれていた所です。ここでは、本島の御嶽に当るものをオン、あるいはヤマと呼んでおります（さいきんはオミヤという人が多くなった）。白保にはカチガラオン・マージャーオン・ア

スコオン・タバルオンという四つのオンつまり御嶽がございます。それを祭っておる部落祭祀、オンの祭祀を司っているのは、スカサ（一般的にツカサという。チカサ、チーカサ、チカ、あるいはスカサともいわれる）と呼ばれているものでございます。これは、村を開いたという伝説を持っている草分けの家柄、それをトゥニムトゥ・トゥネムトゥというわけですが、まあ同族の総本家という所でありましょうか、その娘が代々そのツカサにつくことになっております。娘が大きくなると、当然他所の家に嫁に参ります。たとえ他家へ嫁ぎ生家を出て姓が変わっても、依然としてツカサであることに異常がないのでありまして、名字が変ってもやはり自分の管轄しているオン、つまり御嶽の祭祀の時には、かならず中心的役割を果たすのであります。

八重山では一般に本家の長男（嫡子・跡継）は、テズルビーあるいはカマンガなどといひまして、御嶽の聖所ウブや祭場となるナカビー、カンダナなどをおく小屋が台風で壊れたりしますとこれを修繕したり、祭祀に支障のないよう管理の役を主として担うものであります。これは男の神役がやりますが、祭祀の中心的機能を果たすのはツカサと称する今いった宗家の娘とくに長女であります。しかし嫁に行ったツカサに子供が生まれまして、その子供にはツカサの役を継がせないものであります。トゥニムトゥつまり総本家の長男が嫁を貰って娘ができると、大体その長女にそのツカサ役を任命するということでありまして、したがって、伯母さんから姪へ譲る伯母Ⅱ姪継承というのが大体の原則であります。もちろんいろいろのバリエーションはありますけれども、そういう体系を大体において取

っております。

タカヌファの両面性

これは、ご承知のように公の部落祭祀、つまり共同体の祭の中心になるわけですが、それを補佐する女性神役の役柄がどうなっているかに問題があるわけです。白保ではその下級神役にタカヌファ（またパカヌファ。それぞれのオンに属し、オンの部落祭祀ではスカサに随って神事に参加し、コンジンの香炉をまつて私的な行事の司祭となる。こちらで言いますとニーガミ、ムラガミ、ウツチガミなどにあたる）という補佐役がおります。白保のスカサは当然御嶽祭祀の主役を担うわけですが、その就任式にあたり神のセジをうけるための神憑りを経過するしなは余り問題となりません。その有無にかかわらずちゃんと世襲的といって良いくらいに継承の系統が続いております。ですからスカサはプリーステス（女性祭司）であります。ト占やハンジ、アカシ、口寄せ等には手を触れず、あくまでも公の部落の祭祀に従うだけであります。つまりシャーマンの機能を果たしておりません。ところが、その補佐役にあたるタカヌファ、これは先程いいました神憑りの症状を起こして、そして万象の占い・判断をすることのできる人（サンジンソウあるいはムナシーに当る）に近い性格を有するというふうにいわれています。

ところが、それと並んで丁度沖縄本島のユタのように、そういう役割を果たしている家筋ではない普通の家の女性でありまして、サーダカンマリでそして巫病に罹り、それを癒すために聖地拝所のあちこち彷徨しているうちに神が現れて、シャーマンになるというケースがあります。こちらの例で

成巫過程をみると、お前はユタになれば、ユタにならないと苦しめるぞ、と指示がある。だけれどもユタになるということは大変苦勞の伴う嫌なことですから、なりたくないといって拒否の返事をする。すると、またやって来て前よりも強く苦しめる。夜中の寝ている最中にうなされる。そこで家の人達は揺り起こして、一体お前どうしたんだというようなことを聞くわけです。そうすると、幻覚に神が現れて来て（あるいは白い髭を垂らした老翁が現れて来て）カミンチュになりなさい。ならないと一生不幸な目にあう、といって責め立てる。そういう経験を何回か繰返しておりますうちに決意して、じゃあなろうというので、巫家（ユタヌヤー）をあちこち廻る。あるいは御嶽^{ウタキ}だとか城^{グシク}、あるいは御願^{ウガン}所^{ジユ}だとかを廻って、いわゆる巡拝をするうちに、ある時突然神がその人に乗移ってきて、そしてユタになるというケースが多いのであります。

そういう沖縄本島のユタのような成立契機をもつ呪術宗教実修者を白保では総括してニンゲーピトゥ（願い人。祈願実修者の意）というように思われます。これには、先程紹介したタカヌファ以上にユタ的な行為をやるわけですからまさしくシャーマンと断言していいのです。このニンゲーピトゥには男・女両方ともおりまして、もちろんオンつまり御嶽の祭祀には、直接関与しないということになっております。

タカヌファの宗教的職能　ところがタカヌファを例にとってみますと、御嶽の祭祀には当然スカサの脇役として神事に関与するけれども、しかし一方、ユタのような性格をもつニンゲーピトゥに近いこ

ともやる。ムヌス（ムナシー）やピールトル（日取り。行事日を選ぶ人）のようなこともやる。ニンゲーピトゥ（ニガイピトゥつまり御願^{ウガン}を施行する人、祈願をする人という意味）は、もう純然たるユタ的なことをやるわけです。個人の家のプライベートなニゲーグトゥ（祈願事）、あるいは健康願、卜占、ハンジ、アカシ、口寄せといったことも致しますから、まさにユタと同じくシャーマンと称してよいのであります。

これに対しタカヌファはブリーステスとしてスカサ神役の補助・脇役をつとめるのですから、明らかに祭司的役割分担をもっています。しかし同時にタカヌファコンジンをまつる香炉を各家のザートウク（床の間）におき、家ごとのニゲーグトゥをささげること、家族の健康ニゲー、命運に関することの判断、その他神のウシメシをうけて事を運ぼうとする必要のあるときは、ここでウガンをあげるわけです。それにはタカヌファのヒラキー（新形式）をすました女性があたることになります。つまりコンジンの神意がタカヌファに伝えられ（シラシ）るという託宣の形をとるのですが、これは明らかに沖縄本島にみられるクデ（クリ）とか久高島のナンチュ（神女）がウブグイ（大庫裡）に飾る香炉を崇^{たか}べて神意をうけるのと同じモチーフをもっています。ですから、よく観察してみますと白保のタカヌファには他の地方の下級神女にみられるように祭司と巫女との二つの機能が合体して示されているものと考えることができます。つまり、ブリーステスとシャーマンとが同居していて、二重的性格を現わしているといえましょう。けれども現在タカヌファの機能は、ニゲーピトゥとかユタ・ムナシ

ーなどとくらべ、かなり低下していて民衆の要望に應じていないように思われます。これは、外から呪術的靈驗性をもつ宗教実修者がはいりこむか、その影響をうけたニンゲーピトゥが新しい外来的要素を受容して変質化したからではないでしょうか。

たとえば石垣市にはご承知のようにユタが相当おりますけれど、ユタは在来のシマンチュではなくて他島（沖縄本島など）からやって来た人、つまり沖縄本島ですでにユタになった人達が、この離島（八重山）の住民達の要求に應じて（商売が成立つものですから）やって来て巫術を施す、ということになって、外来者のシャーマンが大分増えてきたのであります。そうすると、本来そういう機能を持っていたタカヌファあるいはニンゲーピトゥといわれている呪術宗教の担い手に対し、著しい需要の減退がみられてきて、衰える一方になってしまった。勢力が衰えてしまったわけです。つまりヘゲモニーを外からやって来たシャーマンのユタや三世相などの易者たちに奪われて、その跳梁にまかせてしまっているというのが、今日の状況でございます。

四 まとめ―下級神役のシャーマン性―

さて、時間がだんだんと迫ってまいりましたので、そろそろ総括にはいりたいと思います。

このように見て参りますと、まず第一に、特に今日の沖縄本島におきましては、ユタとそれからヌ

ルというものは厳然たる区別があります。カミンチュとユタなどのごときを一緒に論ずるなど、まったく言語道断だという考え方の人が多いのであります。けれども、その本島においてすら、離島だとか周辺部の辺地に参りますと、少なくとも下級のカミンチュは、極めてユタ的な行為をやっていることは明確であります。これを先島（宮古・八重山）へ拡げて見て参りますと、正に今日沖縄本島においてユタが行なっていた巫俗的機能を、少なくとも最近までサスとかカカリヤンマ、ムヌスンマ、あるいはニンゲーピトゥ、タカヌファといわれる下級の脇役神女が担っていたことが明瞭になるわけでございます。

最近は交通機関の発達で離島間のコミュニケーションが非常に容易となり、交流が激しくなり、飛行機で宮古であろうと八重山であろうと離島であろうと、その日の内に飛んで行くことができるわけです。したがって、沖縄本島のユタなどはほとんどんそういう所へ出かけて行つて働くわけです。沖縄本島のユタはいろいろと採まれていますから、各方面の知識や技術を大變たくさん吸収しています。占いの技術も高度に練磨されています。つまり専門家の素養をもち、プロフェッショナル意識が濃厚であります。しかも新しい民衆の宗教的要求にはきわめて敏感で、すぐさまそれに順応しようとしてゐる。あえて言うならば、成立宗教教団の運動方針を先取りし、新興の諸宗教をも反面教師として研究し、新しい要素をどんどん取り入れて発展を期しているわけであります。そういう洗練された呪術性を有し、高度な靈驗性をもつプロフェッショナルなユタが、素朴な先島、それまで余りディスター

ブされない離島などの周辺部へ参りますと、その力働に圧倒されて在地の人達が太刀打ちできなくなるのは当然であります。そこで主客が転倒してしまつて、ついに外来のユタが異常に活躍して在来土着の地位を奪つてしまうことになります。その現在の状況をもつて、それがそのまま沖繩における本来の姿であつたというふうに判断するならば、これは事実を誤ること大なるものと私は思うのであります。その一端を極く僅かな例証で証明したわけでございます。

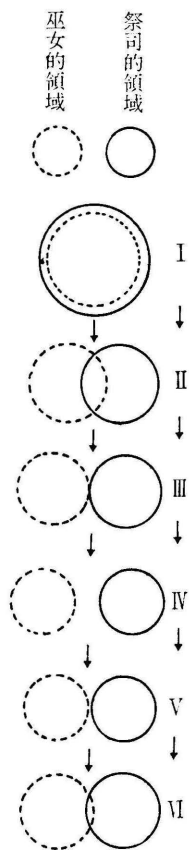
さらにこの点に即して調査を進めてまいりますと、かつてカミンチュであり、その家筋にあつたものが今や堂々たるユタになつて、さかんなユタグトゥ（巫業）をこころみている例が沖繩本島にはたくさんみられるのであります。私は、そういう方々に数多く面接しました。本部町の備瀬、海洋博の会場となつたところでありますけれども、あそこのカミンチュが名護市に出てユタになり、そこで非常に繁昌している方がございます。与那城村屋慶名^{ヤケナ}においてもそういうケースのユタがでございます。

ところが今度は、普通の家の出であるユタがそういうふうに勢力を持つてまいります。そして他方、祝女制度がしだいに弛緩してきます。司制度^{ツカサ}も崩れてまいります。これを先島の人達は、ツカサ崩れといひます⁽¹⁹⁾けれど、そうなつてくると今度は、こともあろうにユタの中から御嶽の祭祀に關与するものが出てきているのであります。それを私は本部半島や山原地方のウンジャミ、シヌグなどの儀礼のなかで見えております。あるいは石垣市四箇の宮島御嶽などでは豊年祭に際しましてツカサと並んでニガイビ、ムナシーなどユタ的巫女がちゃんとそのカミザア（神座）、クムイザア（籠り座）に顔を

出しているという珍現象さえもが起っているのです。これが今から二、三〇年前とかあるいは太平洋戦争以前などであつたら、土地の人達、カミンチュ達は、目の色を変えて怒つたであらうでしょう。断乎として追放につとめたでしょう。けれども今やそういう変化が、さしたる拒否や抵抗を示すことなく行なわれているということは注意しなければならぬ現象だと思ひます。この点はもう少し実例を示して論及しなければならぬのですが、別の機会にゆづることにいたします。

さて以上のように眺めてまいりますと、こんにちのカミンチュのなかにみられる顕著な巫女化、つまりツカサ崩れ、そして民間巫女にみられる神女化、そうじて祝女イズムと巫女イズムとの混同はまぎれもなき現実であります。これをどのように理解したらいいのでしょうか。そこに問題はしばらくれてくるように思われます。

まず民間巫女の性格ですが、今日では神女と全く相容れない関係にあるユタ・カンカカリヤなどは、その根源を辿つて参りますと、かつては何等かの形で御嶽^{ウタキ}やオンの祭祀をはじめ部落^{ソノ}全体の宗教的機能に関与し、そこで主役を負うたカミンチュの機能を、分担していたことが窺知できます。言葉をかえていいますと、部落祭祀と民間信仰とが分化されない以前には両方の要素が融合した形で機能し合つたわけです。ところが宗教的分野と機能との分担化がすすみ、いつの時代にか二つの領域が分化し、それぞれを自らの独自の機能として専門分担するようになった。そしてその傾向が時代の推移と共にだんだんと進んでまいりましたため、両方の溝が深まり今日に立ち至つたのであります。すでに申し



述べましたように、そういうふう判断しうる材料が多いのでございます。したがってこの状況を図式化して参りますと、右のように示すことができます。

すなわち初期の段階では、祝女・ツカサなどカミンチュの祭司的領域と家や個人の卜占・祈願・グワンスグトゥなど民間巫女の民間信仰的領域とが未分化ですから、両者は重なり合って、宗教実修者の専門化がみられません。それがIの図柄となります。ところが次第に専門化がすすみ両者の領域が分化して参ります。けれども完全に分かれてしまわない段階ではIIが示すように、両図が交叉する形態を示します。そしてこの傾向が進むにつれてIII、そしてIVの完全分離型に達するわけです。尚王朝が祝女制を国家官僚制下に包括し、公的性格を強調し民間巫女を体制外へと疎外した形はIV段階で示されましょう。しかし、その体制は琉球国の版図内で貫徹されたわけではありません。王権の威力が直接および沖縄本島とか王家の歴史と深くつらなる伊是名、久高などの離島、さらに奄美・先島で尚朝政権治下におかれるところでは貫徹されたでしょうが、その圏外にある辺遠の地では、依然として

先代の伝統的形態が持続しているわけですから、十分に地域差のあることを考慮にいれねばなりません。そうすると、ⅣのみではなくてⅡ、Ⅲの型態も相当にみられるわけです。この点は宮古・八重山において下級神女のなかに巫女的機能が強く生かされていることから証明できましよう。

そのことから直ちに類推されるのは、国王の権力体制が弱体化するか解体するにつれて、中央の規制力が弱まるか排除される。それによってつまりⅣ型が解体されて、Ⅲ、Ⅱ、ときにはⅠ型へと逆行する推移を示すこともありうるわけです。実際、尚王朝の終末を告げる廃藩置県後、そしてまた日本政府による官僚支配が解体した太平洋戦後の連合軍治政下において、神社化された御嶽祭祀の復元、巫女による民間信仰の賦活などでⅢ型、Ⅱ型が再現されつつあります。これらは、たとえ旧態への遡源を示すものではあっても、当然そのままの復元とはなりませんから、先向き推移のⅤ型、あるいはⅥ型として考えなくてはなりません。このような状況を、旧体制（アンシャンレジーム）に拘泥し、それを本来の在り方と考えている人たちからみると、祝女制の歪曲、ツカサ崩れ、あるいはユタマンチャーとして映ずるわけです。

このようにして、今でこそ神女カミンチュと巫女とは顯然たる区別がつき、ことに識者はそれがあるべき本来の姿であると信じておりますけれど、そういう觀念が定立したのは、いうまでもなく尚王朝が成立して国家体制が整い、祝女ヌルの正当性を高く掲げて、それを官制の中に取入れた段階で出てきたと思います。しかし、このヌル信仰の根幹をなすニーガン、ウッチガンだとか、あるいはクデ、ウクリイン

がだとか、というような、より以前のマキヨ・間切の段階では、これはもうずっと民間信仰の領域に接近してまいりまして、祭司と巫者の両者が融合未分化の形で一貫調和していた時代、それが相当に長く続いたにちがいないと思います。歴史的な推移、社会的な諸条件の変動、島人（住民）^{シマノヒ}の宗教的要望度というものがいろいろとクロスいたしまして、専門的な分化をとげるとともに、それらが尾を引きながら今日にいたったわけでありますから、複雑な要素を含んだ諸形態が今日各地に展開しているのではないかと思います。そこで、そういう絡み合った糸の素れを整序し、ひとつひとつの糸筋を辿ることによって正しく体系化してゆかねばなりません。そのためには、すでに整序された領域よりも複合混乱したところ、もつれあつた分野を問題としなければならぬでしょう。それは下級神人の機能範囲であり、民間巫女の活躍する民俗宗教の側面です。これが私のいう第三の対象領域なのでございます。

そして今いった私の第三の領域の研究を通して今後この問題点の解明に努力いたしますならば、余りにも頑なで動脈硬化に陥った、あるいは狭い視野に限られる、この沖縄宗教文化の研究、琉球神道の研究が意外に大きく進展し、輝かしい曙光のさすことが期待されるのではないのでしょうか。そこに沖縄民俗宗教のケルンを明らかにしうる可能性がひそんでいるのではないかと思う次第でございます。大変大胆な私見を述べましたけれど、真意は沖縄学を愛し、その飛躍を誰よりも強く望むわけで、それ以外の何ものでもありません。賢明なる皆様の忌憚なきご批判を浴びたいと存じます。

ご清聴ありがとうございました。

注

(1) 九学会連合沖繩調査委員会編『沖繩研究文献』I、II、III、一九七一一二年、および法政大学沖繩文化研究所『所報』掲載の文献目録など参照されたい。

(2) 一九七三年、弘文堂刊。

(3) 「与那部落調査報告——ウンジャミを中心として——」『民俗研究』6、一九七八年。

(4) いろいろの報告があるが、もつとも信をおけるのはわずかである。

(5) 岡本恵昭「宮古島の祖神祭——符俣・島尻を中心として——」『まつり』17、一九七一年。

(6) 比嘉政夫「玉城村仲村渠の門中組織」『沖繩の社会と宗教』一九六五年、平凡社刊。

(7) 東京都立大学南西諸島研究会編『沖繩の社会と宗教』（一九六五年、平凡社刊）の常見純一氏ら。

(8) ユタの機能については拙著『沖繩のシャマニズム——民間巫女の生態と機能』（一九七三年、弘文堂刊）第三篇、参照。

(9) たとえばシモ門中のウクリインガの西銘カメさんは、自分の門中から新しく出るナンチュ西銘秀子さんの家でイザイホー期間中の心構えをさすとともに神衣の着付けを指導し、家内の神々に無事の成功を祈っている（一九七八年一月一日筆者見聞）。

(10) 筆者一九七〇年の調査による。また饒平名健爾氏の調査（『シャーマニズムの考察——宮古・伊良部村佐良浜の事例から——』『琉大史学』四、一九七三年）参照のこと。

(11) 佐喜真興英『シマの話』郷土研究社、一九二五年。

(12) 詳しくは前掲拙著『沖繩のシャマニズム』第一篇第二章、参照。

- (13) 第五章「村落共同体の宗教機能と巫俗——沖縄県来間島の部落祭祀と民間信仰——」、参照。
- (14) 第一篇第二章「葬墓制と巫俗」および第二篇第二章Ⅶ「マブイワカシのヌジファ」、参照。
- (15) 比嘉政夫「八重山川平におけるお嶽をめぐる儀礼と祭祀組織」『民族学研究』三四—一、一九六九年。
- (16) 拙稿「琉球巫俗と共同体の神女組織——沖縄シャマニズム研究の課題(一)——」(『民族史学の方法』雄山閣、一九七七年、所収)。
- (17) 琉球大学社会人類学研究會編『白保——八重山白保村落調査報告——』根元書房刊、一九七七年。
- (18) 本田安次『南島採訪記』明善堂、一九六二年、など。
- (19) 拙稿「ツカサ崩れとユタマンチャー——琉球巫俗の一つの問題——」『日本民俗学』七九、一九七七年。